

チャレンジが誇りを持って働ける社会へ ～ICT技術が拓くユニバーサル社会～ 竹中ナミ氏（社会福祉法人 プロップ・ステーション理事長）

挑戦すべきことを与えられた人々「チャレンジ」

場所は神戸の六甲アイランド。事務所があるフロアを歩くと多くのチャレンジとすれ違う。チャレンジとは、障害を持つ人を表す新しい米語であり、「神から挑戦すべきことを与えられた人々」「挑戦という使命、課題あるいはチャンスを与えられた人」という意味です。



社会福祉法人プロップ・ステーションは『チャレンジを納税者にできる日本』というスローガンを掲げています。事務所で一際明るい笑顔を見せ、金髪のメッシュが入り、日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2002」ネット部門や、米国大使館より「勇気ある日本女性賞」等を受賞している女性が今回取材するプロップ・ステーション理事長、皆から「ナミねえ」と呼ばれている竹中ナミ氏です。

オカンは強い！



写真-1 娘の麻紀さんと

竹中さんがチャレンジの自立を考え始めたのは、娘麻紀さんの誕生がきっかけでした。現在38歳になる麻紀さんは「重症心身障害」であり、視覚は光を認識できる程度。竹中さんは「うちの麻紀は永遠のベビー・

タイプ、私の究極の片思いやね」と、とても愛おしそうに話します。その表情からは子供のためなら何でもできるという母親としての強さと優しさが伝わってきます。さらに、竹中さんは「私は、私が死んだ後、麻紀が生きていける世の中を作りただけ。そういう意味では単なるオカンのわがままやね」と語りますが、そのわがままこそが、多くのチャレンジに就労のチャンスと誇りを与える原動力となったのです。

道を開いたコンピュータ

まず、チャレンジを納税者にするには、健常者の社会に飛

び込んでも働くことのできる“武器”が必要でした。そこで、全国のチャレンジにアンケートを取ることにしました。アンケート結果



写真-2 パソコンセミナー風景（神戸）

を見てみると、仕事をしていない人の80%が就職したいと考え、そのうちコンピュータ関係の仕事をしたいという人が47%でした。つまり、多くのチャレンジがコンピュータを使った就労を希望しており、適切な支援さえあれば在宅で仕事を行い、自立できると考えたのです。しかし、プロップ・ステーションを設立した1990年当時は世間でもまだパソコンがそれほど普及しておらず、まずはパソコンやソフトを調達することから始まりました。そして、調達を終えると、チャレンジが参加できるパソコンセミナーを開催したのです。

成功モデルの提示

どんなにセミナーを開催してチャレンジが技術を習得しても、働く機会を得ることができなければ、チャレンジが納税者になることはできません。仕事を得るという事、チャレンジを納税者にするという事は、成果品が趣味程度の物であってはなりません。もちろん定められた納期も守らねばなりません。発注者が完成度の高い成果品を望むことはチャレンジに対しては、健常者に対しても同じです。循環型社会を築くためにはチャレンジが企業から仕事を受け、企業のニーズに応え、適切な報酬を得る、「チャレンジだってこんなことができるんやで」という成功モデルを親も含めた社会に提示することが重要なのです。

チャレンジが行う在宅ワークは、画像作成ソフトを使った絵本の作成やホームページ作成、紙資料のデータ化とネットワーク化等、活躍する場合は広がりつつあります。さらに、現在新たな取り組みとして「スイーツで活躍するチャレンジを生み出そう」とい



写真-3 KSC パン講習風景